

## カンボジア西部村落部における内戦の二つの痕跡

2011年から私が調査している地域は、カンボジア西部に位置するバタンバン州のボヴァル郡農村部だ。バタンバン州は、肥沃な土壌で知られ稲作を中心とする農業が盛んに行われている一方で、1990年代後半までクメール・ルージュなど反政府軍と政府軍との間で戦闘が続いた地域でもある。カンボジアでは1970年から1990年代までポル・ポト時代や内戦といった政治的暴力が吹き荒れたが、こうした過去の経験を人々はどのように語るのだろうかということに関心をもって、私はこの調査地に入った。

この地域に住み込んでからしばらくして、男たちの多くが刺青をしていることに目を引かれた。10代や20代の若い男たちは、龍やトラ、花など具象的な図柄を刺青にしている。彼らは市場に行って、彫師から刺青をいれてもらう。こうした刺青をいれるのは、自分を美しく見せるためだという。

40代以上の男たちの刺青は、その図柄も動機も若い男たちの刺青とは異なる。刺青の図柄は「ヨアン(yoan)」と呼ばれ、幾何学的な文様とパーリ語の経文から成っている。この文様は魔除けや厄除けのためのもので、布や紙に描かれ家屋の内部に張られたり衣服の中に入れて携帯されたりもする。彼らが刺青をいれたのは、銃弾に当たらないため、自分の身を守るためのものだった。この地域では、兵士となり実際に戦闘に参加したことのある男は多く、特に40代から50代の男の約8割が1979年から1990年代後半までの間に兵士となった経験をもつ。その刺青は20年、30年前にいれたもので薄れており、「あまりはつきりとしていない」ので美しくないと感じずかしそうに言いながらも彼らはカメラの撮影に応じてくれた。



写真1 51歳の男の刺青（2011年11月撮影）

ヨアンと呼ばれる図柄の刺青を施したのは、宗教的・呪術的知識に長けた僧侶やクルー・クマエと呼ばれる民間の伝統医療師だったと言われていた。こうした刺青をいれた男たちに、誰が刺青を施したのか、あるいはその技法に習熟している人はこの地域にいないのかと尋ねていた。それは、刺青をいれる手順や様子などを詳しく聞き取るためであり、そこから内戦下での人々の生活の一端を少しでも知りたかったからだ。しかし、男たちの答えは、刺青を施した人は他の地域へ移ってしまったか、すでに死んだというものだった。調査地で私がようやく見つけ出したかつて刺青を施していた人物も高齢で病に伏せており、結局聞き取りは叶わなかった。少なくともこの地域では、内戦の終結とともに刺青に関して変化が起こっている。

内戦時の暴力の経験は、言葉にして語ることが困難だけでなく、時間の経過とともにぼやけていく刺青のように次第に薄まって忘却されていくのだろうか。彼らにとってそれは良いことなのかもしれない。しかし、彼らが経験した過去に接近する手がかりは全く無いのではないかと、他者の経験や記憶については何も分からないのではないかとという焦燥感にも駆られた。

ただし、内戦時に兵士をしていた男たちの皮膚の表面にあるのは、ぼやけてしまった刺青だけではない。刺青について話をしているうちに、私と彼らの会話はしばしば、刺青を

いれる必要があった内戦時の状況へと向かう。そして、上着やズボンを脱いで、内戦時に自分が被った傷痕を指さして示す。その傷痕は、銃撃された後に残った銃創だったり、地雷によって失った指や足だったりする。彼らは、勲章のように傷痕を誇示するのではなく、淡々とその傷痕を示す。



写真2 48歳の男の背中に残った銃創（2011年11月撮影）

戦闘中に味方の誤射によって銃で撃たれたと言うひとりの男は、自分の肩の少し下を軽く叩いて、銃弾の破片が「ここにまだ残っている」と言った。また、「寒くなると、ときどき痛むんだ」とも言った。そして、私にそこに触れるように促し、私の手をひっぱった。私は、恐る恐る彼の肌に指を這わせ、その皮膚の下に何かゴリッとしたものがあるのを感じた。この時に、彼と私はいったい何をしているのだろうか。また、私が恐る恐るしたように、妻や親、子供、キョウダイなど彼の周囲にいる人々が、そうした傷痕や、銃弾の破片が埋まっている皮膚を指でなぞることがあるのなら、その時に彼らは何を感じとるのだろうか。こうしたやり取りをどのように考えればよいのかが私には分からず、フィールドから帰ってきた今でも考えている。